古市場遺跡
鳥屋場2号古墳

2000年3月

長野県飯田市教育委員会

古市場遺跡
鳥屋場2号古墳

2000年3月

長野県飯田市教育委員会

例　言

1. 本書は市道万才線改良工事に先立って実施された、飯田市座光寺古市場遺跡・鳥屋場２号古墳の緊急発掘調査報告書である。

2. 調査は、飯田市建設部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3. 調査は、平成10年度に現地作業、平成11年度に整理作業及び報告書作成作業を行なった。

4. 調査実施に当たり、基準点測量を株式会社ジャステックに委託した。

5. 発掘作業・整理作業に当たり、遺跡略号として古市場遺跡はＦＩＢ、鳥屋場２号古墳はＴＹＢＫ2を一貫して用いた。

6. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。

竪穴	－	ＳＢ
集石・石積み	－	ＳＩ
土坑	－	ＳＫ

7. 本書の記載順は遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。

8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』1998年版の表示に基づいて示した。

9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行なった。

10. 本書の執筆と編集は馬場が行なった。

11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ(単位cm)を表している。

12. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、遺物及び図面類は飯田市考古資料館に、写真類は飯田市上郷考古博物館に保管している。

本文目次

例言
目次
第Ⅰ章　経過　1
　第1節　調査に至るまでの経過　1
　第2節　調査の経過　1
　第3節　調査組織　1
第Ⅱ章　遺跡の環境　3
　第1節　自然環境　3
　第2節　歴史環境　3
第Ⅲ章　調査結果　9
　第1節　調査区の設定　9
　第2節　基本層序　9
　第3節　古市場遺跡　9
　　(1)竪穴
　　(2)土坑
　　(3)集石・石積み
　　(4)その他の遺構
　　(5)遺構外出土遺物
　第4節　鳥屋場2号古墳　14
第Ⅳ章　総括　20
　引用参考文献　21
　報告書抄録　27

挿図目次

挿図1　調査遺跡および周辺遺跡位置図　4
挿図2　基準メッシュ図区画調査位置　8
挿図3　遺構分布図　10
挿図4　ＳＢ01・02、ＳＫ01～03、ＳＩ01・02　12
挿図5　ＳＩ03・04　13
挿図6　鳥屋場2号古墳測量図　15
挿図7　石室？及び地業跡　17
挿図8　墳丘上及び2トレンチ東側拡張区自然流路　18

図版目次

第1図　ＳＩ03・04、ＳＫ02出土遺物　22

表目次

表1　遺構土層注記　19

写真図版目次

図版1　鳥屋場2号古墳調査前　1トレンチ北半　23
図版2　ＳＫ02　ＳＩ03　24
図版3　石室？内礫　鳥屋場2号古墳調査後　25
図版4　重機作業風景　発掘作業風景　26

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

平成8年度に飯田市建設部土木課より、飯田市座光寺上野地籍における市道万才線改良工事の計画が提示された。事業計画地は埋蔵文化財包蔵地古市場遺跡・鳥屋場2号古墳にかかり、同年10月7日、長野県教育委員会・飯田市建設部・飯田市教育委員会の三者で保護協議を行ない、とりあえず試掘調査を実施しその結果に基づいて改めて協議することとなった。

協議に基づいて試掘調査を平成10年8月20日～9月3日に実施した。その結果、古市場遺跡は縄文時代以降各時期の遺構・遺物があり、繰り返し集落が営まれたと考えられるが、今回計画部分については現道・水路のため調査範囲や安全性の確保は難しく、本調査の実施は困難と判断された。また、鳥屋場2号古墳については、遺存状況は必ずしも良くないが、なお石室の一部が遺存している可能性が高く、古墳の築造時期や石室の形態等解明するために、本調査を実施することが必要であると判断された。そこで改めて二者協議を実施した結果、本発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査の経過

平成10年9月24日、本発掘調査に着手した。まず、鳥屋場2号古墳の墳丘測量調査を行ない、続いて9月28日、重機を入れて近世に積まれた石積みを撤去した。引き続き作業員を入れ人力で石室の検出作業を行なった。写真撮影・測量調査等を行ない、11月4日現地での作業を終了した。その後、飯田市考古資料館において、現地で記録された図面・写真類の基礎的な整理作業を行なった。

平成11年度は、引き続き、飯田市考古資料館において出土遺物の水洗・注記作業、遺物の拓本とり、遺構図等の作成・トレース作業、版組み等行ない、本報告書作成作業にあたった。

第3節　調査組織

(1)調査団

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　小林恭之助（～平成11年12月）
冨田拳啓（平成11年12月～）

調査担当者　馬場保之

調　査　員　佐々木嘉和。山下誠一。吉川　豊・渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志。下平博行
福澤好晃・坂井勇雄
西山克己（財団法人長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センターより派遣、平成10年度）・藤原直人（同前、平成11年度）

作　業　員　　岡田直人。熊谷義章・小島康夫。樋本宣子。福沢トシ子。正木実重子。松下省三
柳沢謙二。吉川正実・新井幸子。新井ゆり子。池田幸子。伊東裕子。金井照子
金子裕子。唐沢古千代。木下早苗。木下玲子。小池千津子。小平晴美。小平まなみ
小林千枝。斎藤徳子・佐々木真奈美。佐々木美千枝。佐藤知代子。関島真由美
高木純子。高橋恭子・竹本常子。田中　薫。筒井千恵子。中沢温子。中田　恵
中平けい子。林勢紀子。林ひとみ。原　昭子。平栗陽子。福沢育子。福沢幸子
牧内喜久子。牧内八代。松下博子。松島直美。松本恭子。三浦厚子。宮内真理子
森藤美知子。森山律子。吉川悦子。吉川紀美子

(3)指導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

(3) 事務局

飯田市教育委員会博物館課

小畑伊之助（博物館課長）
小林正春　（　〃　埋蔵文化財係長）
吉川　豊　（　〃　埋蔵文化財係、～平成11年3 月）
山下誠一　（　〃　〃　、～平成11年3 月）
馬場保之　（　〃　〃　）
渋谷恵美子（　〃　〃　、平成11年4 月～）
吉川金利　（　〃　〃　）
福澤好晃　（　〃　〃　）
伊藤尚志　（　〃　〃　）
下平博行　（　〃　〃　）
坂井勇雄　（　〃　〃　、平成11年4 月～）
麦島博晴　（　〃　庶務係長）
牧内　功　（　〃　庶務係）
松山登代子（　〃　〃　、平成11年4 月～）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

飯田市座光寺地区は市街地の北東4 kmにあり、北東を下伊那郡高森町、南東は天竜川を挟んで同喬木村、南西を飯田市上郷と接しており、飯田市の北端部に位置している。

飯田市は赤石山脈と木曽山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

座光寺地区の場合、断層運動でつくられた段丘で大きく上・中・下段に分けられる。上段は木曽山脈の山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。特に地区を区画する北側の南大島川、南側の土曽川・栃ヶ洞川による扇状地の形成、開析谷の浸食は著しい。中段は上・下段に比較して非常に幅が狭く、市座光寺支所付近では下段との比高差は小さく、北側では南大島川の上部浸食谷と連続する。下段は数段の小段丘からなり、南側は比較的段丘面がよく残る。これに対して北側は、南大島川の押し出しにより段丘崖が不明瞭になっている。

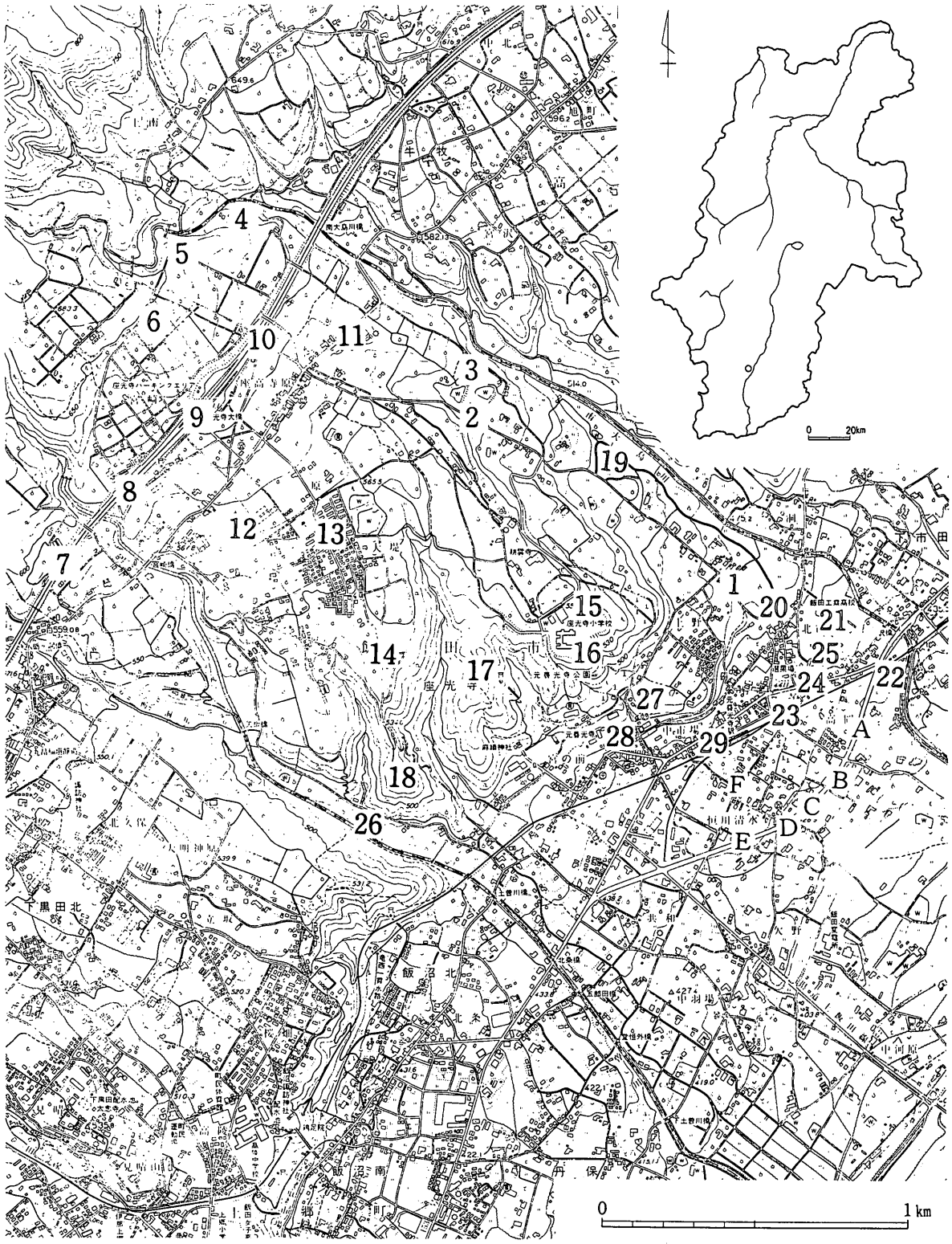
古市場遺跡・鳥屋場２号古墳は、座光寺地区の北部中央、中段上に所在する。座光寺地区と高森町を画する南大島川が木曽山脈より流れ出しており、その開析谷は浸食が著しく規模が大きい。その浸食谷は地区中央部では南大島川の現河床から２段を成しており、上部は比較的広い面となっている。古市場遺跡は浸食谷上部の東側突端にあたり、南大島川との比高差は約20mを測る。

第２節　歴史環境　（挿図1）

座光寺地区は土器・石器等の遺物や古墳の多いことで古くから知られており、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に表われた先人達の活動の証は旧石器時代末までさかのぼる。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており、上段と中・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。

上段では縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、とくに山麓部には縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍蔵の調査で知られた大門原遺跡等、また、扇端から上段の段丘崖にかけては弥生時代後期の標式遺跡である座光寺原遺跡・中島遺跡がある。

縄文時代草創期よりも古い遺跡・遺物はこれまでのところ確認されていない。縄文時代早期では、宮崎Ａ遺跡（長野県教委　1971）・米の原遺跡・大門原遺跡で押型文土器が出土している。中期は多くの遺跡が知られているが、発掘調査された事例は少ない。大久保遺跡では、中期初頭の竪穴住居址１軒が調査され、良好な土器群が得られている（飯田市教委　1997）。大門原遺跡は東面した緩傾斜の扇状地



1.古市場遺跡・鳥屋場2号古墳　2.半の木遺跡　3.美女遺跡　4.大井遺跡　5.大久保遺跡
6.大門原遺跡　7.宮崎A遺跡　8.宮崎B遺跡　9.大門原B遺跡　10.大門原D遺跡
11.井下横遺跡　12.南原遺跡　13.座光寺遺跡　14.中島遺跡　15.北本城城跡　16.北本城古墳
17.南本城城跡　18.浅間砦　19.壱丈薮3号古墳　20.畦地1号古墳　21.新井原・石行遺跡
22.新井原12号古墳　23.高岡1号古墳　24.高岡3号古墳　25.高岡4号古墳　26.ナギジリ1号古墳
27.金井原瓦窯址　28.如来寺境内　29.古瀬平遺跡
恒川遺跡群…A.新屋敷　B.阿弥陀垣外　C.恒川B　D.恒川A　E.田中・倉垣外　F.薬師垣外

挿図1　調査遺跡および周辺遺跡位置図

扇央部分にあたり、大規模な集落址の存在がうかがえる。平成８年度に農道改良に伴い発掘調査が実施されており、縄文時代中期中葉から後葉の伊那谷有数の大集落が広がっていることが確認されつつある。この他、宮崎Ｂ遺跡・座光寺原遺跡（今村　1967）・宮崎南原遺跡では、縄文時代中期後葉の住居址が調査されている（長野県教委　1971）。後・晩期は、断片的に遺物出土がみられるのみで、人々の生活の場はほとんど確認されていない。その中で、山中の大笹遺跡（周辺遺跡位置図範囲外）では、後期前葉の注口土器等が出土している。南大島川縁の大井遺跡では、詳細時期不明であるが、3 基の集石が調査され、川に面した臨時的な調理場と考えられている（飯田市教委　1997）。

弥生時代では、中期の遺跡はほとんど知られておらず、後期に遺跡数の急激な増加がみられ、米の原遺跡や大門原遺跡でも土器片が採集されている。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。後期前半の座光寺原遺跡（今村　1967）や大門原Ｂ遺跡（長野県教委　1971）は後半までは継続しておらず、短期間に集落が廃絶している。続く後期後半では、中島遺跡（下伊那誌編纂會　1991）・宮崎Ａ遺跡等の調査例がある。中島遺跡は、昭和50年農業構造改善事業に伴ない道路部分が調査され、さらに、平成８・９年度には広域農道新設に先立ちその東側部分が発掘調査され、大規模な集落であることが改めて確認された（飯田市教委　1999c）。座光寺原遺跡・中島遺跡とも低湿地を控えており、畑作と水稲を組み合わせていたと考えられる。

古墳時代では、大井遺跡で南大島川旧河道から管玉２点が出土しているが、他に当該期の遺構が確認されていないことから、遺跡の性格等不明な点が多い。この他、上段では、古墳は井下横古墳１基があるのみで、考古学的な痕跡は稀薄となる。同様に奈良・平安時代についても断片的に遺物が得られているにすぎない。現状では、古墳時代以降は散在的に小規模な集落があった可能性が考えられよう。

中世には、段丘崖上部に北本城城跡（1981年調査）・南本城城跡・浅間砦が築かれ、小河川に開析された複雑な地形を生かしている。北本城城跡は４つの曲輪を主体とした居城的な城郭で、16世紀中頃松岡氏の支城であったとの伝承がある以外は記録等全くなく、その築城・廃城の時期や治めていた氏族等も不明である。現在のところ、座光寺の地名に共通する座光寺氏の居城であるという説が有力である。平成２年度に行なわれた児童センター建設に先立つ二の曲輪の調査では、恒久的な施設ばかりでなく簡易的な施設も確認され、この部分が居住機能と防御機能とを併せ持っていたことが明らかにされた（飯田市教委　1992a）。また、平成９・10年度の広域農道新設に関わる調査で、城跡の西側を区画する堀が確認された（同　1999d）。南本城城跡は、現在でも良好に当時の姿をとどめている城跡であり、防御施設の整った防御専門の城郭で、北本城に関連するとされる。

近世では、大門原Ｄ遺跡で火葬墓・土葬墓５基が調査されている（長野県教委　1971）。

中・下段地帯は縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代毎占地した地点を若干異にしている。

旧石器時代終末から草創期にかけての遺物は、新井原・石行遺跡で中世の溝址から有舌尖頭器が出土している（岡田　1986）。

縄文時代の集落は主に南大島川から発達した扇状地に立地する。中期を除く他時期は遺物が中心で、集落の実態は明確でないが、資料が十分でない時期にあっては比較的良好な資料を提示している。草創期の遺構・遺物は美女遺跡（飯田市教委　1998a）で断片的に確認されており、爪形文土器群・表裏縄文土器が出土している。早期では、美女遺跡で立野式期の集落が調査され、11軒の竪穴住居址・炉穴・

集石等の遺構や多くの土器・石器が出土している。立野式土器の成立過程を解明すると同時に、伊那谷における縄文社会確立期の姿を明らかにする上で、重要な遺跡である。また、半の木遺跡では、広域農道建設に先立つ発掘調査で樋沢式土器や同じ時期の遺構が調査されているし（同　2000a・2000b）、新井原・石行遺跡で細久保式土器・沈線文土器・条痕文土器等が出土している。さらに、恒川遺跡群の新屋敷遺跡では細久保式・高山寺式土器の出土や、相木式期の遺物集中や塩屋式期の遺構等がある（同　1986）。続く早期後葉には、半の木遺跡で土坑から茅山下層式土器1個体が出土しているし、美女遺跡では早期後葉から中期初頭まで断続的に集落が営まれており、早期後葉～前期初頭の良好な土器群が得られている。前期は、前述の美女遺跡を除けば、断片的な資料が恒川遺跡群で得られているにすぎない。しかし、中期については、新井原・石行遺跡で後葉のかなり大規模な集落の一部が調査されており、低位段丘の大規模集落の存在に目を向けさせることになった。後期から晩期前半にかけての様相は、前期同様詳らかではない。晩期終末には新井原・石行遺跡から竪穴住居址と浮線文系や条痕文系の土器群が見つかっている。また、美女遺跡では貯蔵穴群が調査され、半の木井に面した低地に水場遺構があった可能性が指摘されている。

弥生時代には、中期前半は断片的な資料はあるものの、これまでのところ遺構が認められない。後半には恒川遺跡群で40軒以上の竪穴住居址が調査されており、広範に住居址が分布し、段丘上全体を居住空間とした集落展開がする。後期前半には遺構の分布が稀薄になり、段丘上の特定地域に居住空間を限定した可能性が指摘されている。後半になると住居址が恒川遺跡田中地籍に集中し、その中でも台地縁辺部の集落域とより内側の墓域の分化がみられるようになる（同　1988）。また美女遺跡では石囲炉をもつ住居址が1棟調査されている。

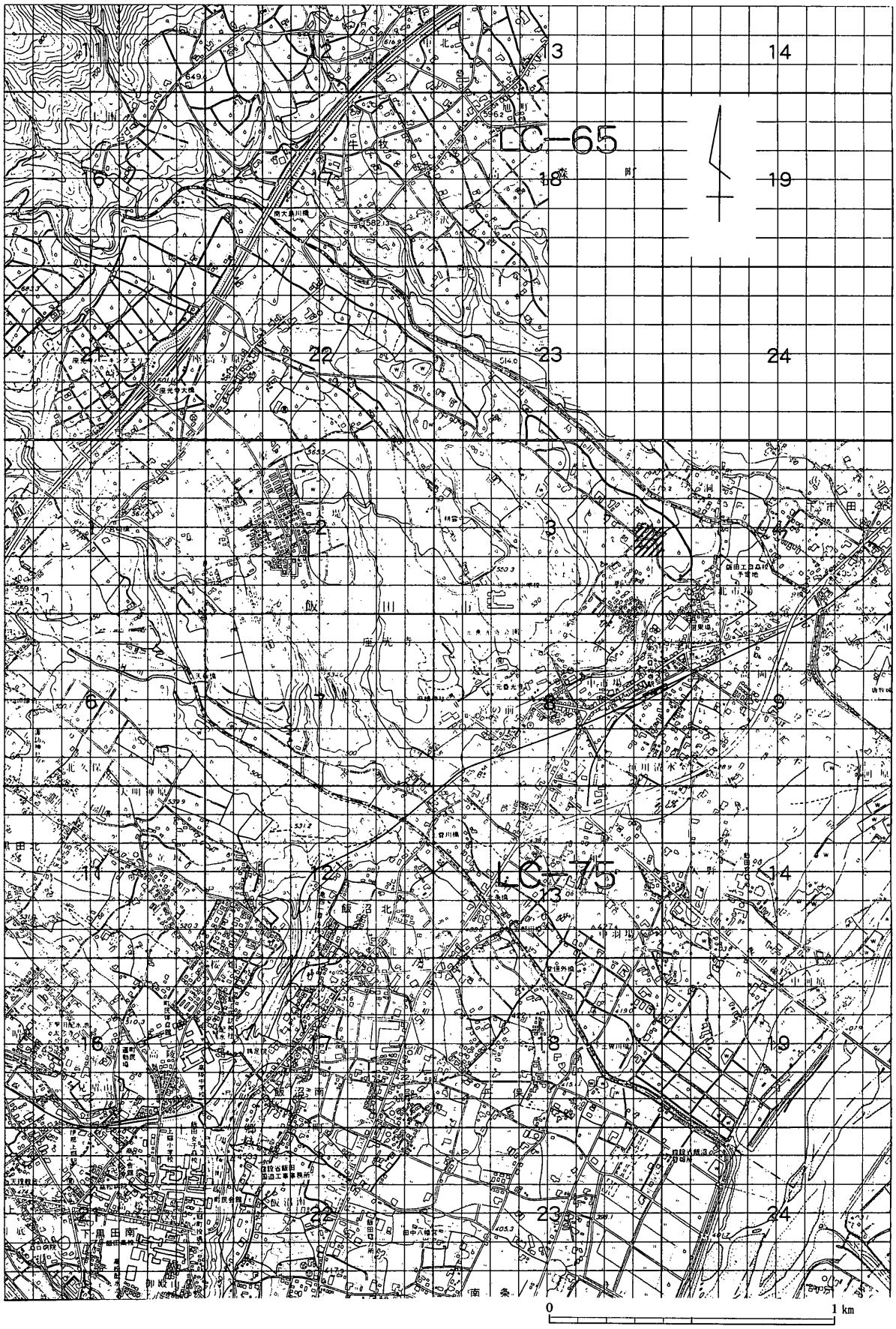
古墳時代前期においては、基本的に前時代にみられた集落展開が継続する。そうした中で、半の木遺跡では弥生時代の遺構・遺物はこれまでのところ確認されていないものの、前期の住居址1軒が調査されている。後期になると、恒川遺跡群では住居址が増加し、ほぼ全域に分布が拡大する。遺物等からみた3～4小期の変遷では、奈良時代直前には新屋敷遺跡や恒川遺跡恒川B地籍に限定的に遺構がみられることから、この時代の集落の在り方は必ずしも一様でなく、終末期にはより政治的な規制が加わった可能性が指摘されている（同　1986）。古墳は竜丘地区・松尾地区に次いで多く築造されており、後期の古墳が多い。その分布は集落の外縁の、高岡1号古墳を中心とする北部の扇状地扇頂付近および恒川遺跡群東側の段丘崖上等にみられ、集落域・生産域とは分化された姿がある。これまで調査された古墳は新井原12号古墳（1922年・1980年調査、飯田市教委　1986）をはじめとする新井原古墳群、畦地1号古墳（1923年他調査）、北本城古墳（1981年調査）、壱丈薮3号古墳（1984年調査）、高岡3号・4号古墳（飯田市教委　1990）・ナギジリ1号古墳（同　1998）等がある。新井原12号古墳では4号土坑から馬具・馬骨が出土し、12号古墳に副葬されたと考えられる。新井原2号古墳では鹿の線刻画のある埴輪片が出土した他、周溝内部から馬を副葬した土坑3基が見つかっている。同じく新井原13号古墳の南東側で殉葬馬の土坑1基が調査されている（同　1999）。また、今次調査地点の東側約50mの畦地1号古墳では銀製垂飾付長鎖式耳飾が出土している。北本城古墳は上段の段丘の縁に占地する。前方後方墳ではないかとされる古墳で、こうした墳形は飯田下伊那地方では他に長野県史跡代田山狐塚古墳があるだけである。濃尾地方の前方後方墳との関連が指摘されている。壱丈薮3号古墳やナギジリ1号古墳は、副葬品に後期古墳に特徴的とされる馬具類が多く、追葬の結果複数組の金環がある。平成10年度には地区北隣の高森町武陵地1号古墳から最古の貨幣『富文銭』が出土

していたことが明らかになり、続いて本地区内でも古墳採集の遺物の中から『富文銭』1枚が発見された。一緒に採取された遺物等から地区北部の古墳群出土と推定されている。

奈良時代には信濃国伊那郡に含まれ、恒川遺跡群はかねてより古代「伊那郡衙」ないし『三代実録』にみられる定額の寂光寺の有力な比定地とされてきた。昭和51年度から実施された一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ恒川遺跡群発掘調査の結果、大型掘立柱建物址群や硯・鉄鈴・和同開珎銀銭等の官衙的遺構・遺物が多数発見されている（同　1986）。そして、昭和57年度から飯田市教育委員会が継続実施している範囲確認調査の中で、古代「伊那郡衙」が追究されてきた。その結果、平成6年度の調査で正倉となる大型の掘立柱建物址が調査され、なお郡衙の中心部は不明であるものの、具体的地点をあげて推定される段階に至った。同時に遺跡群内の各地点が果たした役割が遺構分布状況から描出されてきている。さらに平成7・8年度の薬師垣外地籍の調査では、区画の溝内部から古瓦が出土し、郡家ないし寺院が付近に存在する可能性が指摘されている。また、バイパス周辺の諸開発に先立つ緊急調査の結果、田中・倉垣外地籍、新屋敷地籍周辺の遺構分布が明らかにされつつある（同　1988・1991a・1991b）。この時代には金井原瓦窯址で瓦生産が行なわれ、半地下無段式窖窯1基と工房址2棟が調査されている（宮澤　1953・54、飯田市教委　1996）。西三河北野系の影響を受けているとされ、高森町古瀬遺跡からも同范の瓦が出土している。また、前述の恒川遺跡群薬師垣外地籍の他、如来寺境内、古瀬平遺跡、新井原・石行遺跡からも古瓦が出土している。

平安時代から中世にかけては、恒川遺跡群を中心に住居址・建物址・溝址・土葬墓・火葬墓等が調査されている。恒川遺跡群では、平安時代前期には前時代の名残りとして官衙的な遺構・遺物があるが、中期以降一般集落に変貌していく。こうした中で小鍛冶遺構を伴なう住居址が多いことから、前代の郡衙との関わりが指摘されている。新井原・石行遺跡では灰釉陶器蔵骨器を伴なう火葬墓等が調査されており（下伊那教育会　1967、飯田市教委　1999ｂ）、官人層の墓所とも考えられている。この遺跡では、平安時代の遺構から押出仏が出土しており、高岡古墳群、古代伊那郡衙、寂光寺等との関連で注目されている。中世には新井原・石行遺跡で土葬墓・火葬墓が多くあり、古墳時代以降連続してこの辺りが墓域であった様子がうかがえると同時に、六道思想定着以前の墓制として、経石を副葬する集石墓があったと考えられている。

以上、座光寺地区の遺跡を中心に各時代を概観した。この歴史的脈絡の中で、古市場遺跡・鳥屋場2号古墳は、畦地・高岡・新井原の古墳群との関係で注目される。



挿図２　基準メッシュ図区画調査位置

第Ⅲ章　調査結果

第１節　調査区の設定（挿図2）

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については、飯田市教育委員会　1998a　『美女遺跡』他参照）。今次調査地点は、ＬＣ－75　3－32内に位置する。

第２節　基本層序

調査地点は、古市場遺跡の南西に面した斜面にあたり、１トレンチにおいても、東端は約80㎝で地山が確認されたのに対し、西端では約３ｍの深さとなる。

基本層序は挿図４のとおりであり、１トレンチの南西側にⅢ層が分布する。これは調査地点の南西側が凹んでおり、土層が斜面堆積し上方側にはⅢ層がほとんど堆積していないためと考えられる。Ⅰ層は薄い耕土とその下の細かい均質な砂層で、約50～100cmの層厚である。地権者によれば、昭和36年の災害時には冠水していないということであり、いわゆる未満水（正徳５年）起源の洪水砂とも考えられる。地山は二次堆積と考えられる砂質ロームで、大きな礫を含み、中には１ｍを超えるものもある。礫は著しく風化したものが多い。遺構はおおむねⅡ層下面で検出した。

２トレンチでは耕土直下に地山の砂礫層が確認され、削平を受けている。

第３節　古市場遺跡（挿図3）

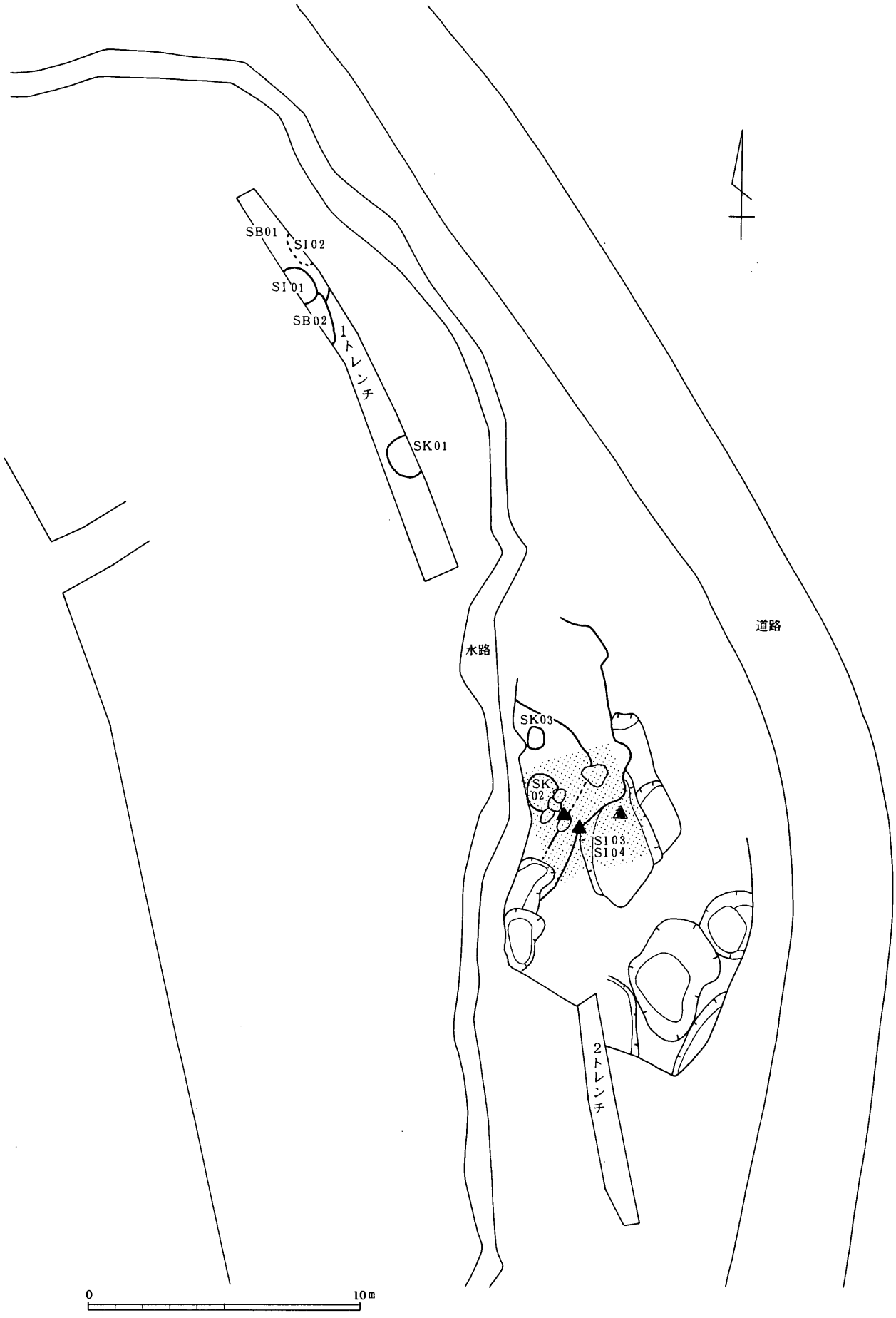
調査された遺構の概要は、以下のとおりである。

竪穴	２基
土坑	３基
集石	２基
石積み	２基

(1)竪穴

①ＳＢ01（挿図4）

１トレンチ北端で検出された。ごく部分的に調査したのみで、平面形・規模等不明である。ＳＩ01・ＳＩ02に切られる。斜面に位置するにもかかわらず、ほぼ水平に埋土が堆積している。埋土中に多く炭化材・炭化物が含まれる。他遺構との新旧関係の把握状況から、本址出土の炭化材・炭化物は焼礫集積


SB01
SI02
SI01
SB02
1トレンチ
SK01
水路
道路
SK03
SK02
SI03
SI04
2トレンチ
0
10m

挿図3　遺構分布図

遺構起源のものではないと判断した。底面は平坦で、硬い部分は確認できなかった。壁はやや不明確で、緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はほとんどなく、時期・性格等不明である。

②ＳＢ02（挿図4）

1トレンチ北側で検出された。ＳＩ01に切られる。傾斜に沿って検出されたことから、遺構でない可能性もある。ＳＢ01と同様、平面形・規模等詳細は不明である。出土遺物はない。

(2) 土坑

①ＳＫ01（挿図4）

1トレンチ南側で検出された。埋土に炭を若干含む。一部調査区外にかかるが、不整円形を呈すると考えられる。規模は径150cm、深さ40cmを測る。緩やかに掘り窪む。

②ＳＫ02（挿図4）

ＳＩ03・04の下部、鳥屋場2号古墳の石室跡とも考えられる部分で検出された。不整楕円形を呈し、規模は150×115cm、深さ45cmを測る。上に1m程度の大きな花崗岩が3個並んでおり、ＳＩ03・04の根石とは考えられないことから、石室側壁用材が転落したものと判断した。内部から副葬品の『寛永通宝』5枚と、棺材に使われたと考えられる鉄釘が出土した。前述の遺物から、近世の土葬墓と考えられる。

③ＳＫ03（挿図4）

ＳＫ02の北西側、前述の石室跡とも考えられる部分で検出した。不整形を呈し、南側上部は緩やかに立ち上がる。規模80×70cm、深さ72cmを測る。出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

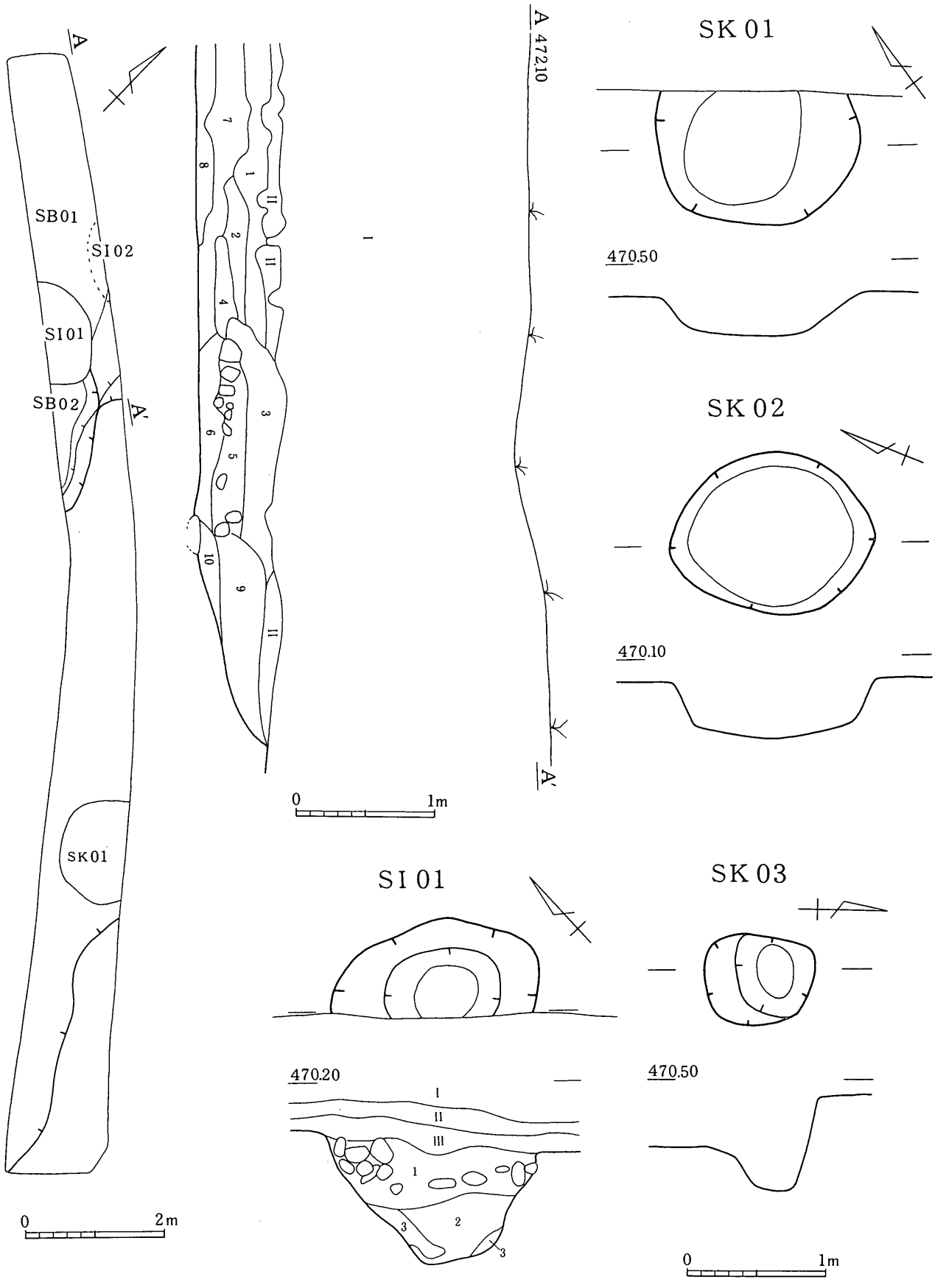
(3) 集石・石積み

①ＳＩ01（挿図4）

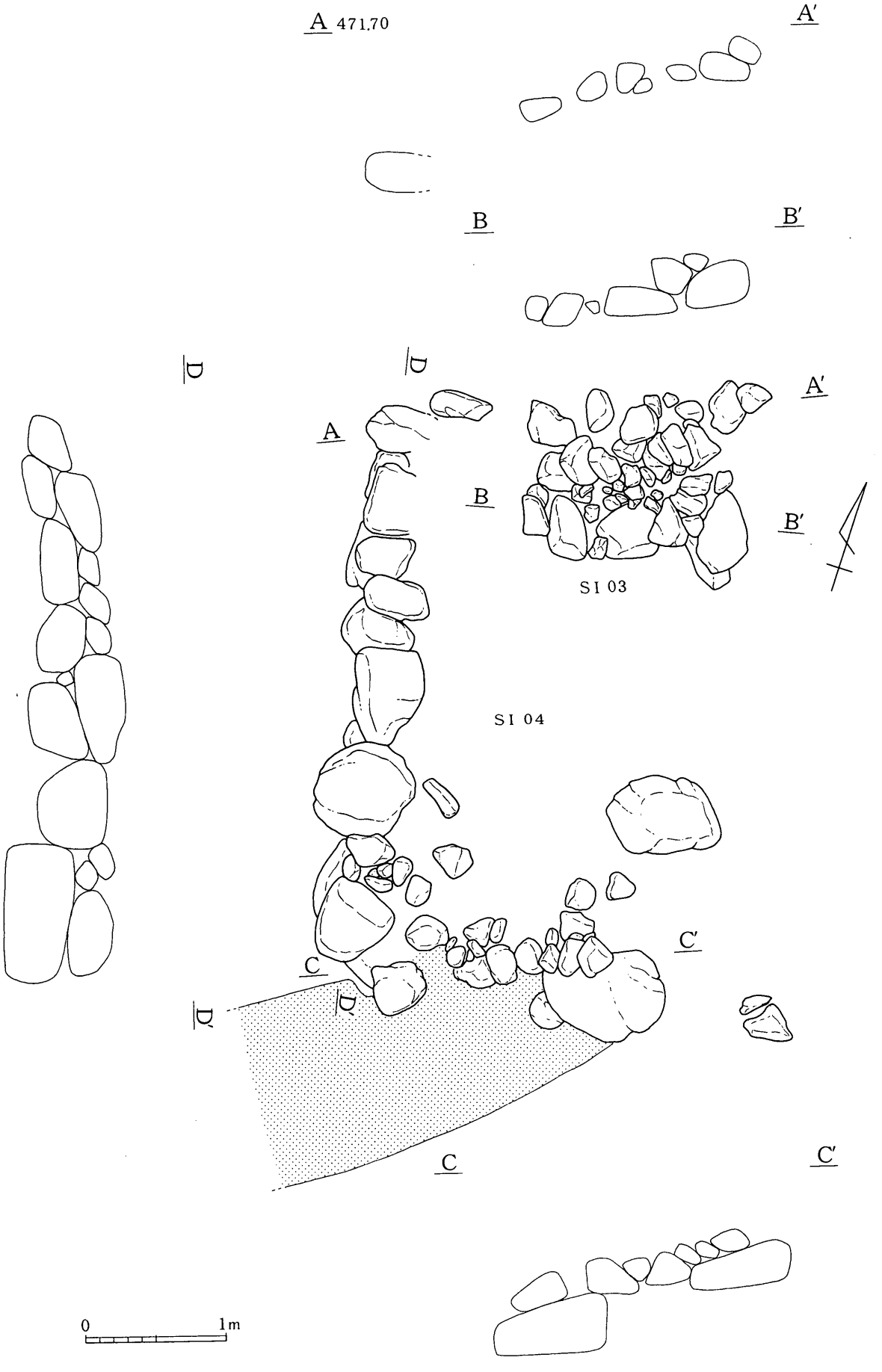
ＳＢ01調査中に、埋土中に焼礫の集積が把握され、検出された。ＳＢ01を切る。トレンチ外にかかり、約 1/2を調査した。掘り方は平面円形・断面逆台形を呈し、上部径 160cm、底面径約50cm、深さ96cmを測る。埋土1層中に径10～20cm程度の焼礫が集中する。底面から多量の炭化材が出土し、側壁はよく焼けていた。出土遺物はなく、詳細時期は不明であるが、縄文時代の焼礫集積遺構である。

②ＳＩ02（挿図4）

ＳＢ01断面精査中に確認された。従って断面のみ把握したにとどまる。ＳＩ01と異なり、焼礫付近に多量の炭化材を伴う。伴出遺物はない。形態等からＳＩ01と同様、縄文時代の焼礫集積遺構と考えられる。



挿図4　SB01・02、SK01～03、SI01・02



挿図5　S I 03・04

③ＳＩ03・04（挿図5）

鳥屋場2号古墳墳丘上で確認された。

ＳＩ03はＳＩ04北辺中央に位置し、南辺は面を揃える。規模160×120cmである。内部に裏込めの小さめの礫がある。出土遺物は須恵器甕が1片あるのみである。

ＳＩ04は、東側は切り株等のため明確に把握できなかったが、南北方向450cmを測る。西辺の礫は2～3段積まれ面を揃えているが、根石のレベルは一定していない。古墳石室の側壁部材を転用していると考えられるが、石室の原形を留めてはいないと判断された。南辺は、中央やや西寄りの石積みが欠けている。この部分のみ内側に20～30cm大のやや小振りな礫が並んでおり、昇降のため意識的に凹ませていたと考えられる。南西隅の巨大礫のみ動かされた形跡がなく、角を打ち欠いて他の石積みと面を揃えている。この巨大礫の本来の面は、石積みの面とは約45°ずれており、古墳の石室用材の一部とも考えられた。挿図3▲は杉の切り株で、腐朽状態から東側2本が西側より古いものと考えられる。東側2本は西側より太く、中央は樹齢100年以上、西側のもので約60年と考えられる。時期の判る遺物は少なく、『寛永通宝』が1枚がある（第1図1）。

ＳＩ03・04は位置関係から一体のものであり、調査前祠があったことから、これに関連したものと考えられる。

(4)その他の遺構

ＳＩ04南西外側に幅130cm程度の硬化面が検出され（挿図5・網掛け部分）、西側に低く傾斜している。ＳＩ03・04に接続する参道と考えられる。

また、ＳＩ03・04下部からは自然流路の痕跡が検出され、地業跡に先立つものと考えられる（挿図8）。

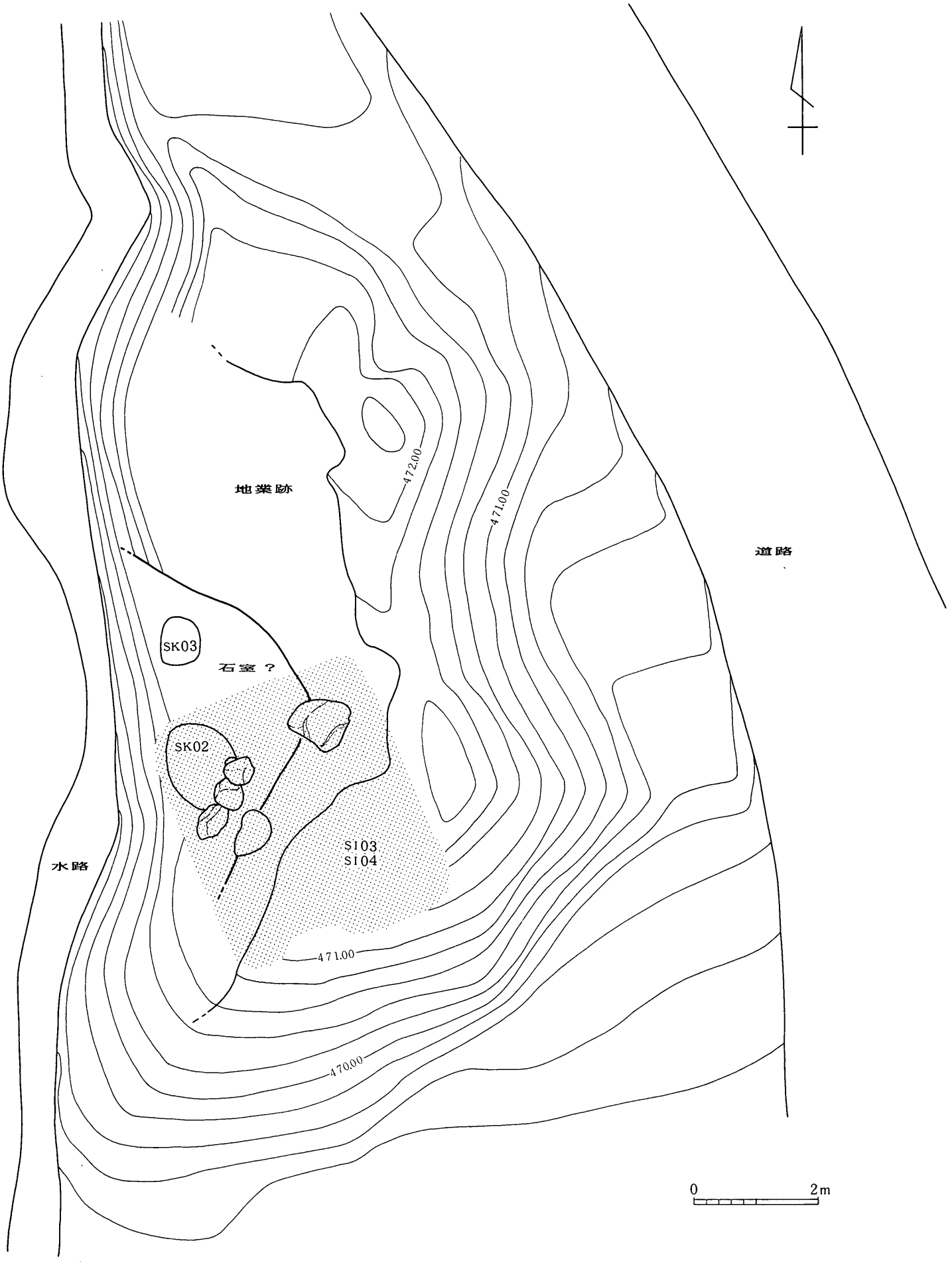
(5)遺構外出土遺物

1トレンチ東半部分、洪水による砂層より下位の堆積土中から土師器小片が出土した。出土状況から、周辺からの流れ込みと考えられる。

2トレンチからの遺物出土はない。

第4節　鳥屋場2号古墳　（挿図6）

『下伊那史』第二巻（1955年刊）の記述からみる限り、本古墳がここに存在したことは疑いないと考えられるが、伝承による石室上部の蓋石・側壁の撤去や、現道開削・水路開削時の改変、および氏神様を奉った際の石積みにより大きくその姿が変えられている。このため、調査は石室の位置の確認に多く時間を要した。なお、以下の調査所見からは、本古墳が本当に古墳であるか甚だ疑問な点が多く、墳丘・周溝・石室等の用語を使用することは不適切の感もある。が、記述を簡便にするため、このまま使用する。



挿図6　鳥屋場2号古墳　測量図

①墳丘

墳丘上に設定した石室確認のトレンチでは、表土の直下に地山のロームが現れ、人為的な盛り土は確認できなかった。本古墳から畦地1号古墳にかけての地形をみると連続している状況があり、墳丘とすれば、削り出しによっている可能性が高い。

墳丘上部には径10～20cm程度の礫が集中していたが、ＳＩ03・04上に礫が被っていること、また、上流側の礫が下流側の礫に被っている状況があり、土石流に起因するものと判断した。ＳＩ03・04のほか、墳丘上には多くの巨礫があるが、ほとんどが土石流によると考えられる花崗岩で、一部著しく風化している。また、ローム層中にも大小さまざまな礫が含まれるが、これも土石流に起因する礫で、ロームも二次堆積と判断された。

②周溝

周溝は、1トレンチでは、平面および断面でも確認できず、水路のため調査できなかった部分に周溝が巡らされていた可能性はあるものの、不明である。また、2トレンチでも周溝は確認できない。2トレンチ東側の拡張した部分は、底面に凹凸があり幅も一定しないこと、壁がだらだらとして人為的な掘り込みと考えられないこと、埋土が砂であることから、自然流路跡と考えられる（挿図8）。

③石室（挿図7）

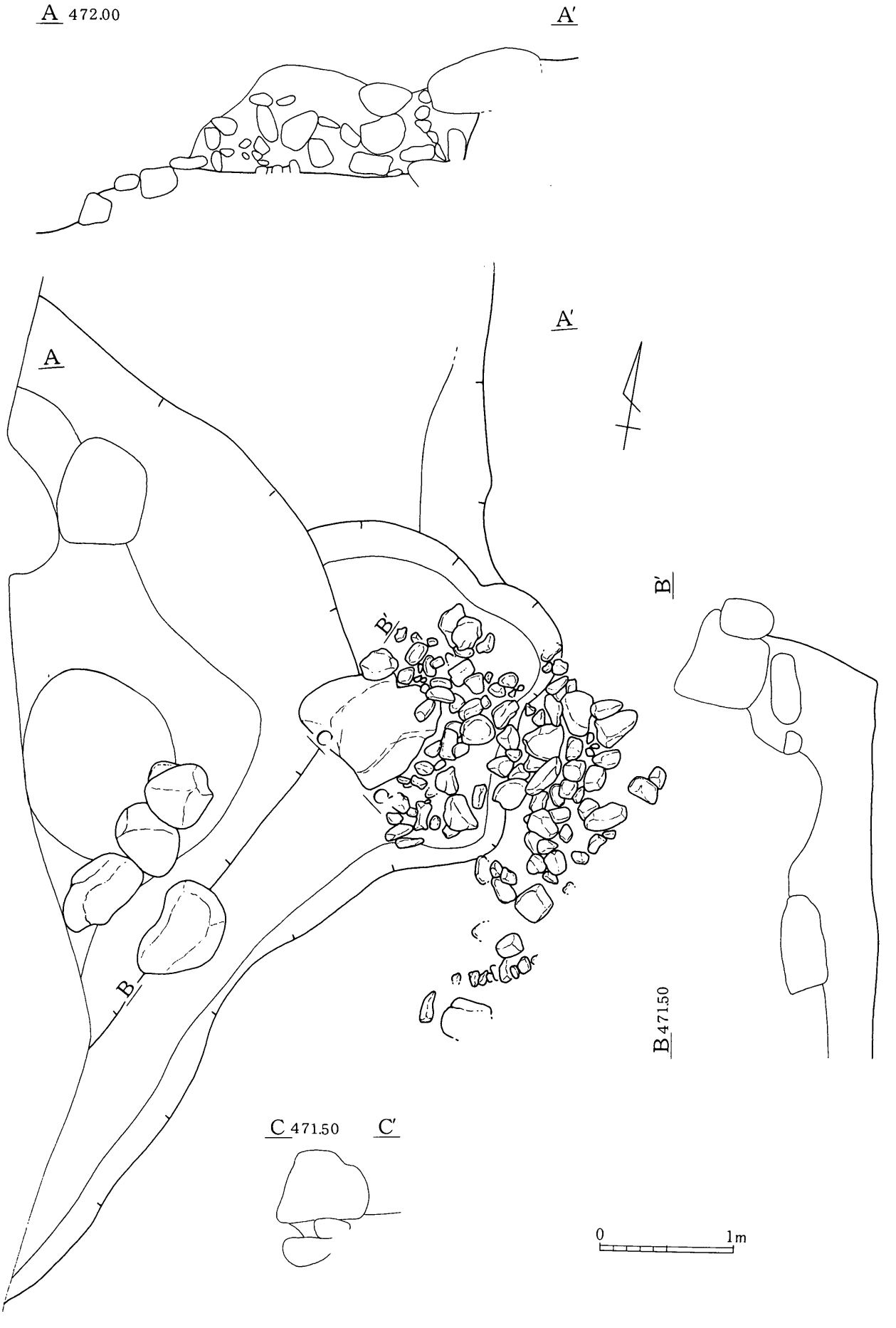
石室は、ＳＩ03・04の下部で、1ｍ内外の巨礫が直交する2辺を有する掘り方内に転落している状況から、この位置であった可能性もあると考えた。西側は現河道で削られ、規模等不明である。検出された巨礫は、ＳＫ02に被る位置で3個、ＳＫ02・ＳＫ03の中間で1個あった。ＳＫ02に被る3個はもたれ合った状態であり、石の面を揃えた痕跡はなく、また裏込めもない。またＳＫ02・ＳＫ03の中間の1個は、南西側を下に斜めになっていた。石室用材とすれば、前者は側壁、後者は奥壁の用材と考えられる。

断面Ｂ－Ｂ’、Ｃ－Ｃ’にかかる2個の巨礫は、掘り方と方向が揃っていることから原位置を保っていると考えられる。しかし、後述の地業で作り出された平坦面に乗っている状態であり、古墳の構築方法とは異なっており、古墳の石室用材ではなかろう。

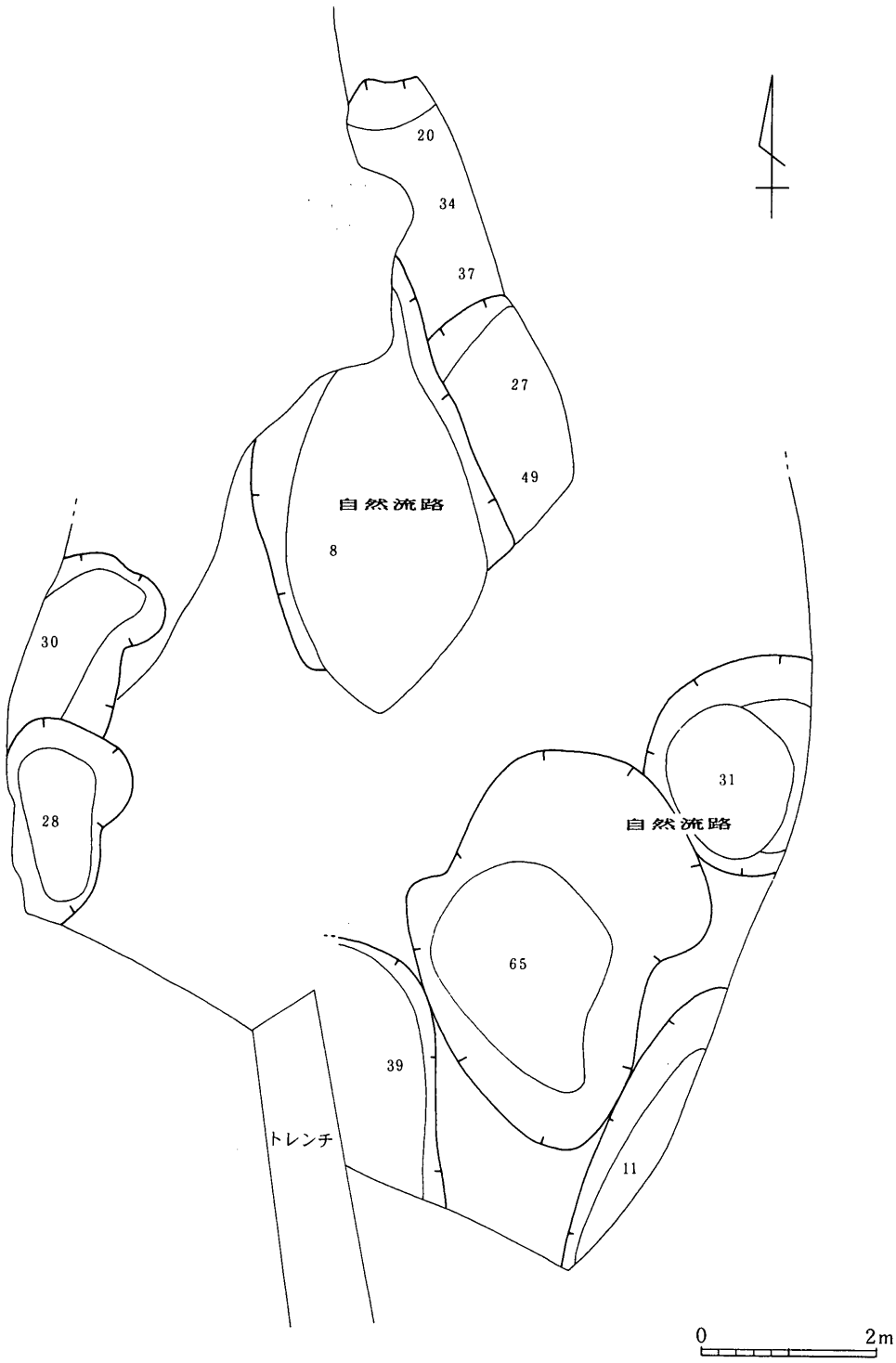
上述のように掘り方は直交する2辺を有し、上半はほぼ直であるが、下半は緩やかとなる。底面及び壁下部は細かい砂があり、掘り方と捉えた部分の外側まで入り込んでいた。こうした状況から、細砂は地山と判断した。石室底面の敷石（亀腹石）は敷かれた形跡がない。

④地業跡（挿図7）

石室とも考えられる掘り方の外側、一段高い位置に検出された。底面は平坦で、北東辺は急な立ち上がりを示す。断面Ｂ－Ｂ’、Ｃ－Ｃ’に挟まれた部分のみ礫を図示したが、Ａ－Ａ’にかけて礫が集中分布する。南東辺は礫の集中はみられない。断面Ａ－Ａ’にみられるように、礫の長辺が上下に立った状態のものが集中しており、また、埋土も黒く柔らかい。巨礫の背後に礫・土を一気に埋め戻し裏込め



挿図7　石室？及び地業跡



挿図8　墳丘上及び2トレンチ東側拡張区　自然流路

されたと考えられることから、地業跡と把握した。

⑤出土遺物

墳丘上からわずかに須恵器蓋・甕片の出土をみるばかりで、本古墳に伴うと考えられる遺物はない。

遺構名	層	JIS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
1トレンチ SB01 SI02	Ⅰ						表土
	Ⅱ	10YR2/1	黒	SiCL	良	やや有	炭化物微量
	1	10YR3/3	暗褐	SiCL	良	やや有	炭化物微量
	2	10YR2/3	黒褐	SiL	良	なし	炭化物少量
	3	10YR3/4	暗褐	SiL	良	なし	ロームが小ブロックで混入
		10YR3/2	黒褐	SiL			炭化物やや多量
	4	10YR1.7/1	黒	SiL	良	なし	混土炭層
	5	10YR2/2	黒褐	SiL	良	なし	焼礫が多数含まれる
	6	10YR3/1	黒褐	SiL	良	やや有	
	7	10YR3/2	黒褐	SiCL	良	やや有	炭化物少量
	8	10YR3/4	暗褐	SiCL	良	やや有	
	9	10YR4/3	にぶい黄褐	SiL	良	なし	炭化物微量
	10	10YR4/4	褐	SiL	良	なし	
SI01	Ⅲ	10YR3/3	暗褐	SiL	やや良	なし	
	1	10YR1.7/1	黒				炭層
	2	7.5YR3/2	黒褐	SiCL	良	やや有	
SK02		10YR3/4	暗褐	SiL	なし	なし	
SK03		2.5YR3/3	暗オリーブ褐	SiC	なし	やや有	
地業跡		10YR4/4	褐	SiL	不良	なし	

表1　遺構土層注記

第Ⅳ章　総括

以上の調査結果を時代毎に概観し、今次調査の総括としたい。

1．縄文時代

この時期に比定される遺構として、ＳＢ01、ＳＩ01・ＳＩ02が挙げられる。ＳＩ01・ＳＩ02は、いわゆる焼礫集積遺構と呼ばれる焼けた礫と多量の炭化材からなるもので、食料の調理施設と考えられる。遺物を伴わないことから詳細時期等不明であるが、類例は縄文時代早期から後期にかけて多く、この時期のものと考えられる。集落内の他、河川沿いの遺跡での調査例が多い。座光寺地区では、大井遺跡・美女遺跡・新井原石行遺跡・大門原遺跡（1999年調査）等、南大島川・土曽川に臨んだ遺跡を中心に調査されている。ＳＢ01もＳＩと同様に遺物がほとんどなく時期不明であるが、重複関係から縄文時代に比定される。

今次調査では、安全性の確保の観点から試掘トレンチでの把握にとどまったが、周辺には該期の遺構が濃密に分布することが予想される。

2．古墳時代

鳥屋場２号古墳は、『下伊那史』第二巻の記述によるかぎり、比較的遺存状況の良好な古墳と期待された。しかし、試掘および本発掘調査の結果、予想以上に大きく破壊を受けており、石室との関連が考えられるものもごく断片的に把握されたにすぎない。具体的には、近世の土葬墓の上位に検出された巨礫が転落したと考えられること、直交する２辺を有する掘り方が検出されたことである。古墳に関わる諸施設も不明な点が多い。また、遺物の面から古墳の存在を裏付けるものはない。調査結果から見る限り、残念ながら本古墳が古墳である可能性は極めて低いといえる。

しかし、一方で、石室かとも思われる部分の周囲に大規模な地業跡が検出されたことは、それに見合った構築物の存在を強く示唆するものといえる。地業跡の年代も明確ではないが、もし、これが古墳築造にかかわる地業跡とすると、古墳の築造方法を検討する上で重要な知見を提供してくれるものである。この場合、古墳築造方法は、地山を二段に削って石室構築場所を確保し、石室構築後に礫や土で裏込めを行なったと考えられる。また、地山削り出しの際、地山に含まれた巨礫を石室用材として使用したものと考えられる。

なお、鳥屋場２号古墳遺跡出土と伝えられる鉄鏃をはじめ鉄製品が、座光寺小学校から飯田市上郷考古博物館に移管されている。

いずれにしても、鳥屋場２号古墳について、その実態は不明というほかない。

3．近世

該期の遺構は土葬墓ＳＫ02、祠の基礎ＳＩ03・04がある。仮に鳥屋場２号古墳が実在のものであるとすれば、古墳の形状に著しい改変が加えられたのは、この時期である。土葬墓が石室用材の転落石の下部から検出されたことから、石室は近世のある時期まで開口しており、横穴式石室によくみられるよう

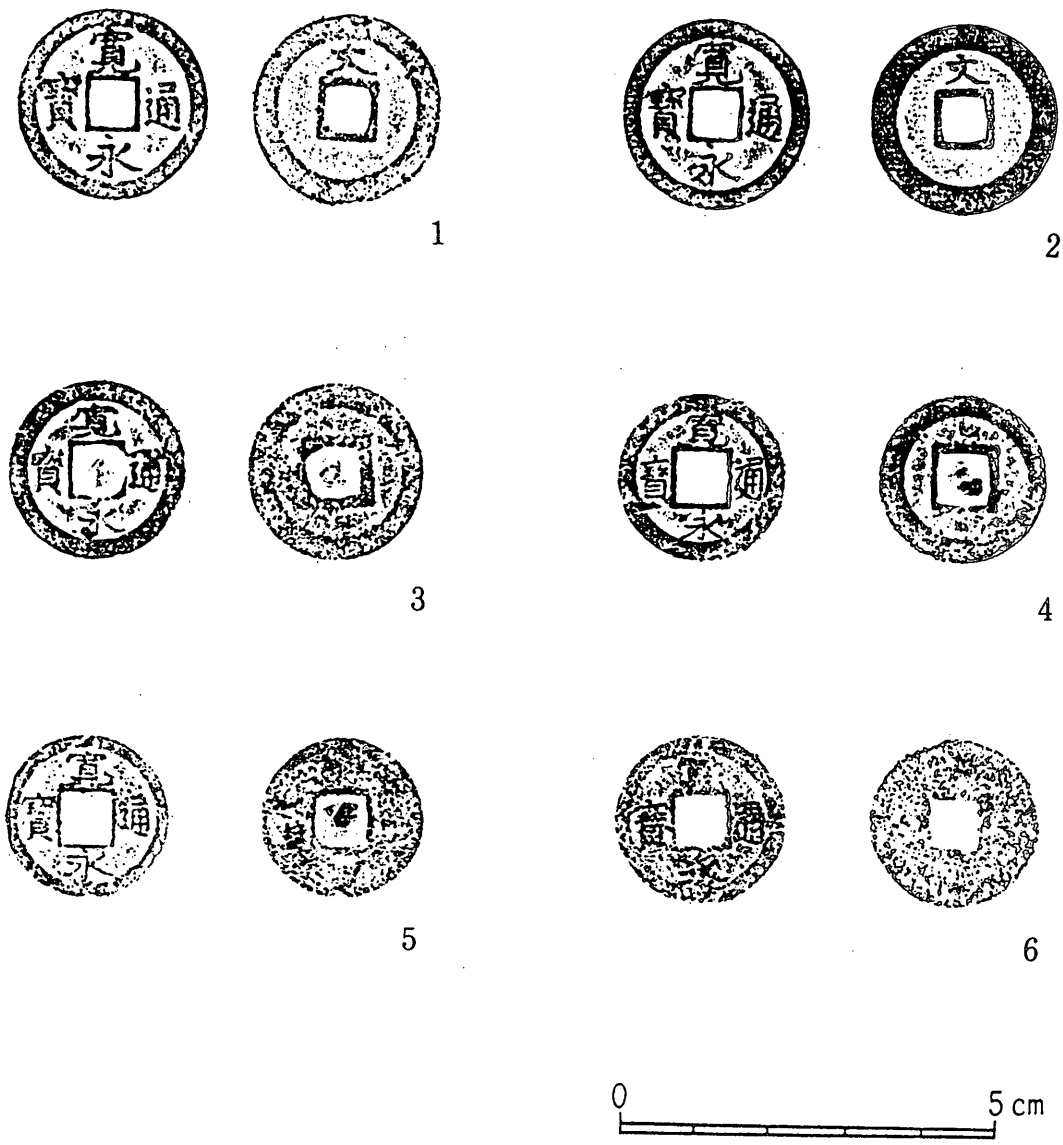
に住居として利用され、また遺骸が埋葬されたと考えられる。さらに、同じく近世のうちには石室を大きく壊して、石積みをして祠が奉られたと考えられる。なお、調査の結果推定された今日まで本古墳が辿った経過は、上記『下伊那史』第二巻に記載された内容とは大きく異なっている。

今次調査では、周辺の古墳群との関係を明らかにすることはもちろん、鳥屋場2号古墳の全容を解明することもできず、甚だ残念であった。しかし、明らかにされた点が多くあることも、また事実であり、今後本遺跡周辺において埋蔵文化財保護の不断の努力を払うことが、今次調査結果を活かし、また鳥屋場2号古墳の姿を明らかにする方途であろう。

《引用・参考文献》

飯田市教育委員会　1986　『恒川遺跡群』
飯田市教育委員会　1988　『恒川遺跡　田中・倉垣外地籍』
飯田市教育委員会　1990　『高岡遺跡　－高岡3・4号古墳－』
飯田市教育委員会　1991a　『恒川遺跡群　新屋敷遺跡』
飯田市教育委員会　1991b　『恒川遺跡　田中・倉垣外地籍』
飯田市教育委員会　1991c　『高岡遺跡　－新井原18号古墳－』
飯田市教育委員会　1992a　『北本城々跡』
飯田市教育委員会　1992b　『恒川遺跡群　白山遺跡』
飯田市教育委員会　1993　『恒川遺跡群　恒川A地籍』
飯田市教育委員会　1994　『長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査』
飯田市教育委員会　1996　『上野遺跡・金井原瓦窯址』
飯田市教育委員会　1997　『大井遺跡　大久保遺跡』
飯田市教育委員会　1998a　『美女遺跡』
飯田市教育委員会　1998b　『ナギジリ1号古墳』
飯田市教育委員会　1998c　『恒川遺跡群　新屋敷遺跡』
飯田市教育委員会　1999a　『大門原遺跡』
飯田市教育委員会　1999b　『新井原・石行遺跡』
飯田市教育委員会　1999c　『座光寺中島遺跡』
飯田市教育委員会　1999d　『稲荷坂遺跡』
飯田市教育委員会　2000a　『半の木遺跡』
飯田市教育委員会　2000b　『半の木遺跡』
飯田市教育委員会　1982～97　『恒川遺跡群範囲確認調査概報』
今村善興　1967　「飯田市座光寺原遺跡」『長野県考古学会誌』4号
岡田正彦　1986　「飯田市座光寺石行遺跡発掘調査概報」『伊那』34-6
座光寺考古学研究会　1976　「飯田市座光寺中島遺跡の調査報告」『伊那』24-3

座光寺村史刊行委員会　1993　『座光寺村史』
下伊那誌編纂會　1955　『下伊那史』第二巻
下伊那誌編纂會　1991　『下伊那史』第一巻
鳥居龍蔵　1924　『下伊那の先史及原史時代』
長野県教育委員会　1971　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－飯田地区－昭和45年度』
長野県史刊行会　1981　『長野県史　考古資料編　全一巻（一）遺跡地名表』
長野県史刊行会　1983　『長野県史　考古資料編　全一巻（三）主要遺跡（南信）』
宮澤恒之　1953・54　「下伊那郡座光寺村金井原瓦窯址報告」『伊那』1-12、2-2、2-3
宮澤恒之　1967　「飯田市中島遺跡」『長野県考古学会誌』4号



第1図　ＳＩ03・04、ＳＫ02出土遺物
（1 ＳＩ03・04、2～6 ＳＫ02）

鳥屋場 2 号古墳調査前

1トレンチ北半(北西から)

図版 2

SK02

S I 03

石室？内礫

鳥屋場 2 号古墳　調査後

図版 4

重機作業風景

発掘作業風景

報告書抄録

ふりがな	ふるいちばいせき・とやば2ごうこふん
書名	古市場遺跡・鳥屋場2号古墳
副書名	
巻次	
シリーズ名シ	
リーズ番号	
編著者名	馬場保之
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-0002　長野県飯田市上郷飯沼3145番地　☎0265-53-4545
発行年月日	西暦2000年3月　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふるいちばいせき 古市場遺跡 とやば2ごう 鳥屋場2号 こふん 古墳	いいだしざこうじ 飯田市座光寺 3253他	2053		35° 32′ 05″	137° 51′ 53″	平成10年 8月20日 ～ 11月4日	157㎡	市道改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古市場遺跡 鳥屋場2号 古墳	集落址 古墳	縄文時代 古墳時代 近世	竪穴　2基 土坑　3基 （うち1基は土葬墓） 集石　2基 石積み　2基	土師器片 須恵器蓋・甕片 寛永通宝　6枚 鉄釘（棺材）	縄文時代の集落址の一端を把握した。 鳥屋場2号古墳は、石室の一部が残存すると伝えられる古墳であるが、近世の土葬墓や祠基礎及び地業跡が調査されたのみで、石室等の詳細は把握できなかった。

古市場遺跡
鳥屋場2号古墳

2000年3月　発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会
印　刷　飯田共同印刷㈱